

令和 4 年度 （2022 年 6 月～2023 年 3 月）

項目別研究内容と確認事項

項 目	回	内 容	確認事項
小中一貫教育の意義の理解	1	○京都大学特任教授 小松郁夫氏による講演『「新しい二宮町型」義務教育の創造』 ○小松氏への質疑応答	・学校形態は変化していく ・家庭教育、学校教育、社会教育のバランスが大事 ・二宮には地域の中に自然、人という財産がある。 ・子供だけでなく大人も学べる学校づくりを・学校運営協議会の役割として、データを活用した学校評価を
	2	プレゼンテーション「小中一貫教育の特長とその成果、課題について」	・地域で子供たちを育てる時代。学校づくりも地域の知見を活かす ・9年間を連続と捉えることで学力面、心の面での成長が期待できるのが小中一貫教育 ・学力不振や問題行動を学校システムを変えることで改善する
	5	義務教育を連続した9年間と捉えることの意義について	○小・中9年間の連続の中で子供の成長を見とり協働で教育活動を進められるという教員・保護者にとってのメリットがある ○常にロールモデルに接することで学べたり、低年齢の子どもの存在が心を安定させたりという子供におけるメリットがある ○6年間、3年間の区切りにとらわれずに9年間の中で学び直し、学び進めで個に応じた学びを実現させやすい ○小中一貫教育が認知能力（数値で計れる能力・・・学力など）や非認知能力（数値で計れない能力・・・協力性、主体性など）を高め、結果として学力向上、問題行動の減少などが実現している
海外の教育事情を知り、二宮でめざす教育を考える	3	○講演「デンマークの教育と日本の教育のこれから」 講師：ニールセン北村朋子氏 ○講演：「諸外国の教育事情」	○デンマークでは、義務教育を通じて民主主義を教え、公立学校の専門知識と実践への尊重を通して生徒の幸せを深めている。 ○日本及び諸外国の教育に関するデータをもとに現在の日本の教育の立ち位置を理解した。

		講師：渡邊恒文氏	
	5	講演のふり返りと二宮町の小中一貫教育で生かせることを協議	○自尊心、自己肯定感を育てる○自主性、主体性を育てる○ICT教育、英語教育の充実○キャリア教育の充実○多様性の尊重 等
先行事例から学ぶ	4	義務教育学校 品川学園を視察	品川学園では施設一体型小中一貫教育校の特長を生かし、切れ目のない9年間で児童生徒が互いに学び合う教育環境を作り上げている。また、コミュニティスクールの機能を活かし、「本物体験」も含むキャリア教育に力を入れている。
	5	視察のふり返りと二宮町で生かせることを協議	○教員の意識変容をもとにした9年間の切れ目のない教育活動○子ども同士、子供と教員が互いに見える環境で、近い将来を見て学び合う
二宮町の目指す子供像と小中一貫教育	2	<u>第2回協議</u> ①二宮町の子供たちの課題は何か ②9年間の義務教育で育てる子供像	キーワード ・自尊感情・自己肯定感 ・自分の強み、良さを生かし発揮する ・将来に向けてのキャリア意識を持つ ・自分のやりたいことを実行、実現 ・大志を抱ける ・内向きではなく広い視野を持つ ・9年間の繋がりを活かす・英語教育 ・キャリア教育 ・ICT
	5	<u>第5回協議</u> ①講演と視察を経て「育てたい子供像」「小中一貫教育校でできること」の検討協議	

令和4年度 開催日

1回：2022年6月20日 第2回：9月21日 第3回：12月9日 第4回：視察 2023年2月9日 第5回：3月3日

二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会経過（概略）報告②

令和5年度（2023年4月～2024年4月現在）

項目別研究内容と確認事項

項目	回	内容	確認事項
9年間で育てたい力（目指す子ども像）の共有	1 2	○二宮町小中学生アンケート結果から二宮町の子どもたちの状況を共有する ○めざす子ども像の実現に向けた、学校、家庭、地域の役割を共有	・子どもたちが安心して進級、進学できるよう、小中の教員が交流し、二宮の子どもたちが生き生きと自分を発揮できる教育環境が必要である。 ・学校、家庭、地域が連携して子どもたちが「自分の核」となるものを育てていけるよう、実践と学びを続けることが大切である。
分離型小中一貫教育の理解	1 4	○三鷹市立おおさわ学園視察報告 ○二宮町施設分離型「にのみや学園」に望むこと ○2023年度のにのみや学園の取り組みについて	・おおさわ学園では子どもたちの交流の充実こそが小中一貫の核であると捉えて人的、予算的措置を講じながら充実に努めている。にのみや学園はまだ開校間もないため、成果を論じるには時期尚早。
不登校、学校の小規模化に対する施設一体型小中一貫教育の意義	2 3	○二宮町の不登校児童生徒数は全国的な傾向と同様に増加している。また、二宮町は単級化や中学校の2学級化などの課題にも直面している。そうした中での施設一体型小中一貫教育校の意義を考える	・不登校に関わる施設一体型小中一貫教育校の意義は、異年齢との関わりを充実させる中で自己肯定感が高まることにある。即効的な対応ではないが、将来的、構造的な解決が期待できる。 ・施設一体型の設置は必然的に学校の統廃合を伴う。新しい学校づくりに合わせて小規模化への対応が図られる。
二宮町の学校教育における喫緊の課題とその対応	2 3	○施設一体型の設置という中・長期的な取組を進めると同時に喫緊の課題も共通理解する必要があるため、二宮町の学校に係る喫緊の課題を出し合い、対応とともにまとめた。	・出された課題は不登校、学校の小規模化、施設・設備に関すること、地域との関わりに関すること、小中一貫教育に関すること、登下校に関すること、その他家庭と学校の関係、放課後の遊びに関することなどが出された。これら課題ごとに望まれるゴ

			ールと対応策案、対応に取り組む主体等をまとめ、さらに優先度（緊急度）を共通理解した。
施設一体型小中一貫教育校の設置場所	4	○研究会において設置場所案を示すことは難しい。設置計画の作成と、設置に伴う諸課題の検討を早期に開始することを提言することとした。	・面積だけをみると、小学校25学級、中学校12学級を算定基準とした場合、候補になりうる設置場所は東大果樹園跡地、一色小学校、二宮西中学校であることが教育委員会から説明された。 教育委員会には、町担当部局と連携して設置場所を定め、設置計画を作成するとともに、学区、通学方法等設置に伴う諸課題の検討と対応を早期に開始することを提言したい。
施設一体型小中一貫教育と学校施設			
提言書の検討			
提言書作成			

令和5年度 開催日

1回：2023年6月12日 第2回：8月23日 第3回：2024年1月12日 第4回：3月27日

他に、提言書作成に係る素案検討会の開催 第1回：2024年2月18日 第2回：3月8日